

2-3					
主題	放尿・放便を繰り返す入居者の対応をチームケアで取り組んだ結果、 尊厳を保てた事例				
副題	「ひもときシート」を活用して 利用者像の理解と利用者視点での課題解決の実現を目指す				
キーワード 1	ひもときシート	キーワード 2	利用者理解	研究(実践)期間	6ヶ月

法人名・事業所名	社福) 東京援護協会 特別養護老人ホームいずみの苑				
発表者(職種)	百塚佳紘(介護主任)、高橋直芳(介護職員)				
共同研究(実践)者	三鍋節子(看護係長)、小池雄(生活相談係長)				

電 話	03-5970-9101	F A X	03-5970-2119
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	板橋区の北側に位置し、苑の前には出井川緑道があり、桜並木を楽しむことができる環境に立地しています。平成7年に開設し、特別養護老人ホーム100床、短期入所生活介護10床の施設です。歯科医師会と連携した誤嚥性肺炎の予防と常勤医師と共に看取り介護支援に力を入れて取り組んでいる施設です。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

U氏は、介助全般に拒否があり、特に排泄介助では誘導タイミングを逃すと、場所を問わず放尿、放便を繰り返していた。また、一日中歩行され靴を脱ぐ行為や、他の利用者の居室に入り込むことを繰り返していた。そのことで、疲れや睡眠不足により左右の傾き、前傾、後屈の様子が見られ、転倒リスクも高かった。特に夜間帯は、対応が困難となり、職員の精神的疲労も日を追うごとに高まっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

①トイレの場所が分からなくなっている事で定時誘導のタイミングとU氏がトイレに行きたいタイミングが違うのではないか。

②靴を脱いでしまうのは外反母趾があたって痛いからではないか。

統一したチームケアの徹底を図ることを目的にミーティングを重ねた結果、提案されたのが「ひもときシート」(以下シートとする)であった。

シートは、援助者の思い込みや試行錯誤で迷路に迷い込んでいる状況から脱する為に、シートのそれぞれの段階で「評価的理解」「分析的理解」「共感的理解」の考え方を学び、援助者中心になりがちな思考を本人の気持ちに添った対応に転換し、課題解決に導くツールである。本研究もシートを使用することで課題をクリアできるのではないかと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①具体的には職員がシートを利用し、週に2、3度のペースでミーティングを実施した。職員が困っていることや負担に感じていることを具体的に記入し、利用者がどのようになってほしいか、また今取り組んでいることを記入した(評価的理解)。次に課題解決に向けて本人の言葉や行動を具体的に整理してみた(分析的理解)。

②話し合った結果以下の対応を実践した（共感的理解）。

- ・情緒面で不穏状態もあったため、医師、看護師と相談し内服薬の調整を行った。
- ・放尿・放便については、排泄リズムを把握する為に個別での排泄チェック表を作成し、2週間経過観察することとした。具体的には、2時間に1回のトイレ誘導を実施した。
- ・靴は、転倒リスク回避の為、脱げにくい靴を模索し、足袋を導入し、歩行状態を観察した。
- ・徘徊による体の負担軽減を考え、レクリエーションの参加やタオルたたみを職員と行った。
- ・他利用者の居室に間違っ入り込まないように本人の居室入口に表札を作り、様子を見て職員も居室環境整備の徹底を図った。

《4. 取り組みの結果》

どのような環境が不快となり得るのか等利用者の状態把握に努め、排泄支援や靴に関する介助方法の統一を図ることが出来た。医務と連携により、薬の調整を行い、情緒面の安定に繋がり介助への拒否も見られなくなった。

排泄チェック表で状態把握することで、排便は午前中に多い事が分かり、トイレ誘導は長めに座ってもらい排便を促すようにした。且つ腹部マッサージをすることで排便がトイレ内で見られる事が増えた。排尿についても誘導毎に出る事が多かった。その結果、トイレで確実に排泄が出来るようになり、放尿・放便が無くなった。

靴については足袋を使用する事で、転倒リスク軽減にも繋がった。

レクリエーションや軽作業は本人があまり好まず、精神的ストレスに繋がった。

表札は、氏名を記入しても認識が困難で自分の居室であるという理解に繋がらなかった。家族より、猫好きであったとの情報があり、猫の写真を貼ることで表札の代わりとした。結果として、他利用者の居室に入り込む頻度が少なくなり、自室に入る事が増えた。

《5. 考察、まとめ》

「シート」を活用し、ミーティングをしたことで、U氏の行動状況及び心理状況を理解でき、支援方法の見直し・改善を検討する良いきっかけとなった。五感への刺激や苦痛となり得る環境の分析や、U氏が負担とならず受け入れやすい支援方法を共有することで、チームとして統一した支援を実施できた。そうすることで安心して受け止めていただき、より確実な排泄介助に繋げることが出来た。

また最近ではトイレに行きたい時に自らトイレに行き、排泄する様子も見受けられ始めており、トイレとしての認識が意識付いてきている。今回の事例を通してチームとして一体となって支援することが身につく、自然と利用者に向き合う視点が確立していけるようになった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ①「ひもときテキスト」発行：認知症介護研究・研修東京センター
- ②「おはよう21」2016年4月号 特集 認知症の中核症状とケア
- ③「認知症の人達の小さくて大きな一言」監修 永田久美子
- ④「和光病院式認知症ケア」－実践ハンドブック－監修 和光病院看護部

《8. 提案と発信》

職員視点での問題解決から、利用者視点に寄り添った本当の意味での課題解決を実現するには、「ひもときシート」の活用を推進していきたい。